
同窓会

雄輔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会

【Nコード】

N7071C

【作者名】

雄輔

【あらすじ】

同窓会でひさしぶりにあった、元彼女の里奈。優斗は、昔の傷を思い出さないように里奈としゃべらないようにする。だが、同窓会が終わった後、公園で里奈と会ってしまう。

（前書き）

初めての投稿です。よろしければ感想をくれると嬉しいです。

この小説の評価よければ、この小説の高校時代などを書くつもりです。

「みんな、ひさしぶり。」

「優斗じゃん。」

「ゆうちゃんだ。」

「遅いぞ。来るのが。」

「そうだよ。1時間も遅刻だよ。」

「ごめん！起きたらもう7時半だった。」

「まあ、優斗が遅刻しないで来たら奇跡だけどね。」

「別に奇跡ではないだろ。」

「学校だって、ほとんど最初のHRに出てないじゃん。」

「あれは朝に弱かったからだ。」

そう言っただけを見回した。

俺の前にいるのは、女二人に男一人だ。

この三人はあまり変わってなかったが、見た感じけっこう変わっている人がいる。

「まだ、来てないよ。」

「わあ！」

びっくりさせるつもりだったのだろうが、気付いてからやってもだめだろう。と思ったが、気にしないことにする。

「来てないって、誰が？」

「誤魔化しちゃダメだよ。」

さっきびっくりさせられなかったので、ちょっと不機嫌だ。

「ごめん。遅れた。」

走って来たのだろう、疲れている。

「謝ってきなよ。」

「いや、俺は別に何も悪いことはしてない。あっちがかってに怒っただけだ。」

と言って、この場所を離れようとした時だった。

「結花ひさしぶり。優斗もひさしぶり。」

「ひさしぶりだね。里奈ちゃん。」

「ああ。」

「もう少しいい反応できないの。」

「できない。俺あっち行くから。」

何かいろんなことを言われたが気にしないで行った。

同窓会が終わり、公園で休憩してる。

「眠い。」

このままここで寝たい。

同窓会はまた来年やるらしい。

正直、同窓会に出るのは辛い。昔の友達に会えるのは楽しいが、行くと辛い思い出がよみがえってくる。来年は行かないと思う。

「優斗。」

振り返ると。

「里奈。」

里奈がいた。もともと彼女だったが、高校の卒業式の日にいるあつて、別れた。

「優斗。あの時のことまだ怒ってる？」

「別に。」

本当は怒っている。

しかし、もう昔のことはどうでもよかった。

里奈のことはもう忘れたかった。

だから、早く話を終わりにしたかった。

「顔が怒ってるけど。」

「もともとこの顔だ。」

俺には、彼女が話しかけてくる理由が分からなかった。

「俺に話しかけるな。」

ちよつと悲しそうな顔した。

俺はますます分からなかった。

なぜそんな顔するのか。

「優斗冷たいね。前はあんなに優しくかったのに。」

「そんな話もういいだろ！俺は里奈のことは忘れる。だから、もう俺前に顔出さないでくれ。」

何も言い返してこなかった。俺はこれ以上いるのはやだったの
で帰ろうとした。

「優斗行かないで。」

振り返ると、里奈は泣いていた。

「なんで、泣いてるんだよ。」

ちよつと苛ついたが、冷静になって言った。

「優斗が私のこと忘れるって言ったから。」

「何なんだよ！裏切ったのは、お前だろ！もういい加減忘れた
いんだよ！」

彼女のことが全く分からない。

裏切って、俺を傷つけて、まだたりないのか。

俺は怒りの限界だった。

「確かに裏切ったけど、私は優斗のことが忘れられないの！何
度も忘れようと思ったけど無理だったの！私は優斗のことが好きな
の！」

そう言って彼女は泣き崩れた。

俺はどうすればいいか分からなかった。

確かに俺は今でも、里奈は好きだ。

でも、俺は里奈のことが分からない。

なぜあの時裏切っておきながら、今になってこんなことを言う
のだろうか？

俺があれこれ考えているうちに、里奈は立っていた。

もう泣いてないみたいだった。

「そんなこと今さら言っても無理だよな。」

頭の中がパンクしそうだった。

「言いたいこと言えてよかったよ。優斗さよなら。」

「里奈。」

そう言って里奈を抱いた。 「優斗。」

里奈は泣きそうな目で見てきた。

「自分だけ、言いたいこと言って帰るのはずるいよ。俺だって、里奈こと好きだ。やり直したいさ。でも、怖かったんだよ。また、傷つきたくなかった。」

「ごめん。私があんなことしなければ。」

「もういいよ。また、二人でやり直そう。」

「うん。ありがとう。」

嬉しかった。またもとに戻れて。言いたいことも言えて。

「青春っていいね。」

「結花！いつからいたんだ。」

「優斗が、もともとこの顔だって言った時からだよ。」

ほとんど最初からだ。

「何恥ずかしがってるの。まあ、最後らへんは、見てること

ちも恥ずかしかったけどね。」

里奈を見ると、顔が真っ赤だった。

俺も顔が赤いと思う。

「じゃあ、私帰るね。今日は楽しいもの見れたし。満足だよ。」

。。

結花は帰っていった。

「じゃあ、俺らも帰るか。」

「うん。」

里奈を好きになってよかったと思う。

いろんなことがあったけど、今俺は幸せだ！

（後書き）

最後まで、小説を読んでもうくださってありがとうございます。前書きでも書きましたが、感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7071c/>

同窓会

2010年12月10日05時48分発行